みやび展

作品のみどころ
―朝日森天満宮特別出展―

福王雪岑・画、平林静斎・書
《土佐光成筆「舞楽図巻」摸本》

能役者が写した土佐派の舞楽図

福王雪岑・画、平林静斎・書《土佐光成筆「舞楽図巻」摸本》（部分）朝日森天満宮所蔵

神に奉納する舞楽の15曲が、題名とともに描かれています。
巻末の款記から、やまと絵の代表的な流派で細密描写を得意とした土佐派の土佐光成（1647-1710）が描いた原本を、福王雪岑が模写したことがわかります。

福王雪岑・画、平林静斎・書《土佐光成筆「舞楽図巻」摸本》（部分）朝日森天満宮所蔵

いきいきと描き分ける舞い手の個性

福王雪岑・画、平林静斎・書《土佐光成筆「舞楽図巻」摸本》（部分）朝日森天満宮所蔵

装束や持物が細部に至るまで忠実に描かれており、原本の土佐派の仕事を彷彿とさせる一方で、軽快な筆致は土佐派と異質です。模写者の雪岑は、江戸の風俗を描いた絵で名高い英一蝶の門人、かつ能ワキ方福王流の当主で土佐派を慕って能や狂言図を遺しています。本図でも舞い手の年齢や表情をいきいきと描き分けています。

非展示部分

福王雪岑・画、平林静斎・書《土佐光成筆「舞楽図巻」摸本》（部分）朝日森天満宮所蔵

俳諧がつなぐ江戸と佐野

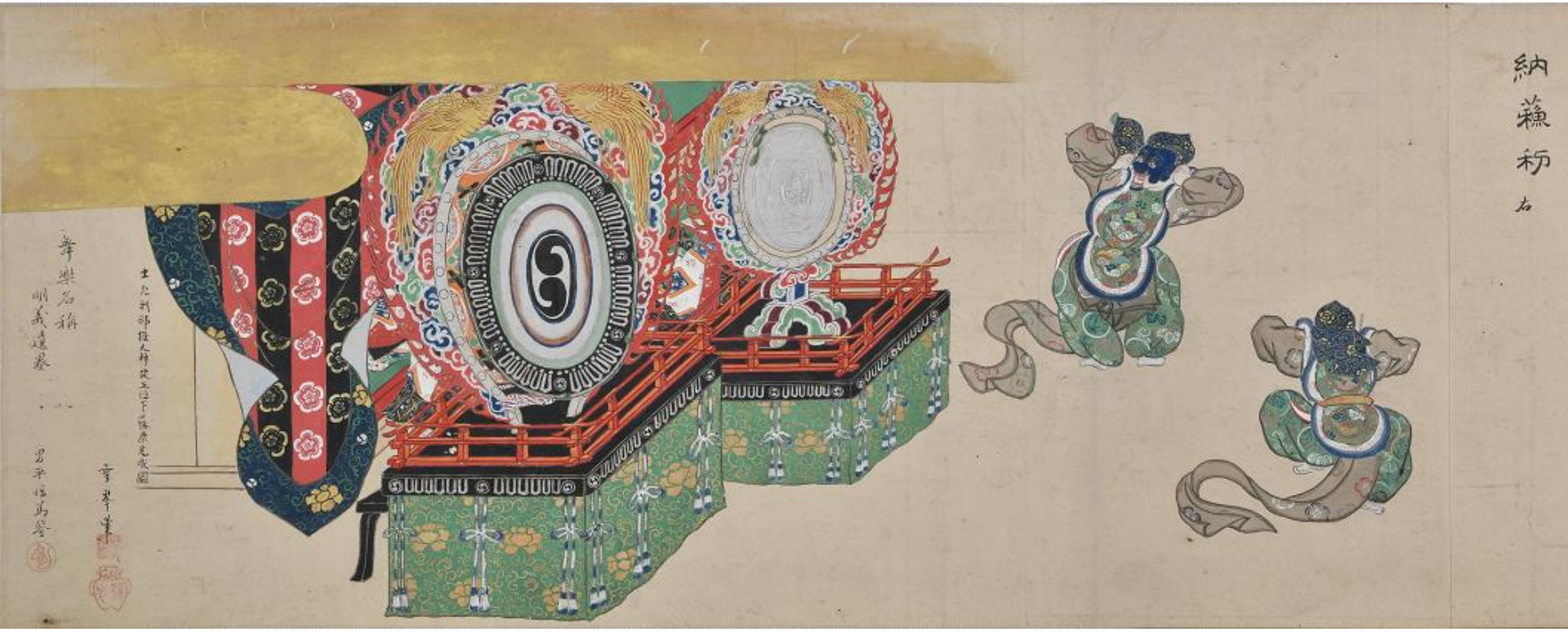
パネル展示部分

福王雪岑の師・英一蝶は俳人でもありましたが、雪岑も俳諧に縁が深かったようです。能楽師・俳人の豊島露月が編んだ俳書によく挿絵を描いており、その一つ『寄進能』（享保14年/1729）には、佐野の須藤杜川や、佐野に関係が深い著名な俳人の常盤潭北・桑岡貞佐の名が見えます。

福王雪岑・画、平林静斎・書《土佐光成筆「舞楽図巻」摸本》（部分）朝日森天満宮所蔵

福王雪岑・画、平林静斎・書《土佐光成筆「舞楽図巻」摸本》（部分、斜光撮影）朝日森天満宮所蔵

パネル展示部分



福王雪岑・画、平林静斎・書《土佐光成筆「舞楽図巻」摸本》（部分）朝日森天満宮所蔵

江戸時代の佐野の文化を考えるヒント

パネル展示部分

福王雪岑・画、平林静斎・書《土佐光成筆「舞楽図巻」摸本》（部分）朝日森天満宮所蔵

巻末には「舞楽名称・明義（平林静斎）遺墨」と静斎の子・東岳が記しています。若い頃に北関東を遊歴した著名な俳人・画家の与謝蕪村は、結城（茨城県）の支援者に静斎の書幅の入手を依頼しています。先述の潭北・露月も蕪村と関係の深い俳人です。

制作から数十年後、高久隆古が箱書きをしています。隆古は復古大和絵を学び南画家・高久靄厓の家を継ぎました。

さらに約40年後の明治34年（1901）、佐野町長をつとめた村山半が本絵巻を朝日森天満宮に奉納しています。制作・伝来経緯は不明ですが、本図巻が佐野にあることは、近世佐野の文化を考える上で多くのヒントを与えてくれます。